福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

医療機関における在日外国人患者への看護の現状

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 智子, 竹田, 千佐子, 月田, 佳寿美, 白川, かおる, HASEGAWA, Tomoko, TAKEDA, Chisako, TSUKIDA, Kazumi, SHIRAKAWA, Kaoru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1008

原　著

福井医科大学研究雑誌　第3巻　第1号・第2号合併号（2002）

医療機関における在日外国人患者への看護の現状

長谷川智子，竹田千佐子※，月田佳寿美，白川かおる
看護学科　基礎看護学講座

A study of nursing care for foreigners in Japan

HASEGAWA, Tomoko, TAKEDA, Chisako※, TSUKIDA, Kazumi, and SHIRAKAWA, Kaoru
Department of Fundamental Nursing, School of Nursing, Fukui Medical University

Abstract :

As foreign visitors and immigrants increase in Japan, medical professionals are increasingly exposed to patients from diverse cultures. The purpose of this study was to describe correspondence by medical facilities and nurses to patients who originated from outside Japan (foreign patients). A self-administered questionnaire was distributed to 1,090 nurses through mailings to six hospitals, and subsequently returned to the researchers by mail. The nurses were asked to answer questions about personnel taking care of and language corresponding to foreign patients, levels of confidence and concerns when they provide care to foreign patients, care points for foreign patients, and personnel corresponding to medical cost problems.

A total of 1,024 nurses (14 males 1,003 females and 7 unknown) answered the questionnaire. Their average age was 31.7 years (SD=8.8), and length of nursing career was 9.6 years (SD=8.4). More than 50% of the nurses answered that there were personnel capable of corresponding to foreign patients in English ; however, only a few nurses said that there were personnel capable of speaking other languages, such as Spanish, Portuguese, Chinese, or Korean. More than 50% of the nurses had been in charge of foreign patients. Most nurses had very low confidence in providing nursing care to foreign patients because of a lack of language ability and knowledge of other cultures. In addition, many nurses indicated that they take communication and informed consent into high consideration when they provide nursing care to the foreign patients. In conclusion, many nurses were exposed to culturally diverse patients but without sufficient preparation for providing nursing care to such patients. To increase nurses' confidence and improve foreign patient care, understanding of and preparations for culturally diverse populations are necessary for medical professionals.

Keywords : foreigner, communication, culture, language, nursing care

※聖隷クリストファー大学　Seirei Christopher College, Faculty of Nursing

(Received 26 August 2002 ; accepted 28 October 2002.)

Ⅰ．緒言

近年，わが国では外国人の入国・在留者が増加，またオーバーステイ外国人の増加がめざましい現状となっている。法務省入国管理局の調べによると，平成12年度の外国人入国者数は約527万人[1]，各市区町村に長期在留を申請した外国人登録者数は約156万人[2]であり，どちらも年々増加傾向にあった。つまり，日本国居住者の約4.4%が外国人，1.3%が外国人登録者であると推定でき，100床以上の医療施設であれば，入院患者の４人ないし５人以上が外国人患者である可能性がある。

また，オーバーステイを含む不法残留者数については，平成14年１月現在，約22万４千人いるといわれ[1]，若干減少傾向にあるものの，大きな社会問題となっている。これらの人々は過酷な労働を強いられ，生活環境，保健，衛生面でも満足な状況下にあるとはいえない上に，費用，言語，または在留資格等の理由で，病状が出現してもなかなか受診しようとせず，いざ来院した段階では，病状がかなり悪化している場合が多い[3]ことが報告されている。これに加え外国人患者の場合，文化の違いや言語問題等から，医療提供者と意思疎通に問題が生じやすく，複雑な問題を抱えるケースが多い。

しかし，このような複雑な状況下にある外国人患者が，全国各地の保健・福祉・医療現場で急増しつつあるものの，医療者側の対応は遅く，外国人の医療・看護のあり方についての研究はまだまだ少ないのが現状である。

そこで本研究では，医療現場で働く看護師の外国人患者に対する意識・受け入れ状況などを明らかにする目的で，外国人患者入院時の対応，ケアを行う上での留意点，ケアを行う自信，健康保険に関する問題の対応などについて，実態調査を行った。

Ⅱ．方法

1．調査対象

今回の対象者は，研究に同意の得られた医療機関（３県，6施設）の看護師または准看護師1090名である。

2．調査方法

各医療機関に質問紙を郵送し，対象者が自記式にて回答した後，医療機関毎に郵送による回収を行った。

3．調査期間：平成13年12月から14年２月

4．調査内容

1）属性：性別，年齢，看護職としての経験年数

2）看護師一人一人が挙げた，対応できる外国語と人員（同一施設で重複あり）：英語・スペイン語・中国語・ポルトガル語・韓国語・その他の言語について，話すことができる職員（医師・看護師・事務職員・ボランティア・通訳・その他）の人数

3）外国人患者を過去５年間に受け持った経験の有無

4）外国人患者が今後入院した場合にケアする自信，およびケア経験者のみ以前ケアしたときの自信：『自信が全くない』から『最高にある』を，0～100mmの線上に主観で回答を得るVisual Analogue Scale（VAS）を使用

5）外国人患者ケアの際の不安点：【言語】【文化の違い】【人種(身体的特徴等)の違い】【生活習慣の違い】【医療に対する期待の違い】【病気に対する考え方の違い】【その他】の中から複数回答

6）外国人入院患者のために病棟あるいは個人的に準備していること：自由記載

7）外国人患者のケアの際の留意点：【宗教】【コミュニケーション】【食事】【インフォームドコンセント】【プライバシー】【身体の清潔】【生活パターン】【生活習慣】【その他】の９項目の中から，上位３位を優先順に抽出

8）医療保険問題発生時の対応者

5．分析方法

統計分析ソフトSPSS11.0jを使用し，外国人受け持ち経験の有無における，ケアの自信はindependent-t検定，ケアの際の不安項目，ケアの留意点，準備状況はχ^2検定を行った。以前ケアしたときの自信と今後ケアする自信の比較は，paired-t検定およびPearson相関係数を算出した。また，ケアの留意点は，１位が３点，２位が２点，３位が１点の重みづけをし，全体の積和を算出した。

Ⅲ．結果

1．属性：郵送した1090人のうち，有効回答は1024人(有効回答率93.9%)で，男性14人，女性1003人，性別不明７人であった。平均年齢は男女差なく全体で31.7歳（SD8.8）であった。また，臨床経験年数においても男女差はなく，全体で9.6年（SD8.4）であった。職種は正看護師747人（72.9%），准看護師277人（27.1%）であった。

2．外国語での対応の現状（表１）：何らかの外国語を話すことができる職員がいると回答した対象者は583人（57.0%）であった。そのうちもっとも多い対応可能な外国語は英語で579人（56.5%），職員の内訳は医師と看護師が多かった。次いでスペイン語263人（25.7%），中国語246人（24.0%）であったが，ポルトガル語，韓国語を話す職員がいると答えたものは非常に少なかった。

表１．看護師が回答した外国語を話す職員の内訳(複数回答)

	対応可能†	医　師	看護師	事務職員	ボランティア	通　訳
英　語	579	547	398	118	29	7
スペイン語	263	221	23	8	5	2
中国語	246	238	227	2	5	1
ポルトガル語	55	17	23	4	8	2
韓国語	15	0	4	0	9	1

†各外国語で対応できる職員が１人でもいると答えた対象者数　n=583(人

3．外国人患者受け持ち経験による分析：

対象者の約半数544人が，過去５年に外国人患者を受け持ったことがあると回答していた。経験の有無を医療機関別に見ると偏りがみられた。

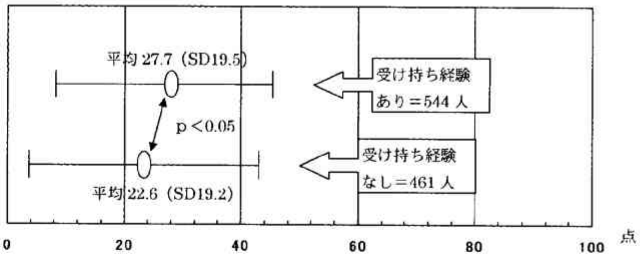

図１．外国人患者受け持ち経験とケアの自信　n=1005

今後外国人患者をケアする自信を見ると，平均25.3点（SD19.5）と全体的に低かった。また，経験の有無で，今後のケアの自信を比較してみると，受け持ち経験あり群（平均27.7，SD19.6）が経験なし群（平均22.6，SD19.2）に比べ有意（$p<0.001$）に高かったものの，両群とも30点以下と低い結果となっていた（図１）。

また，ケアの経験者における，以前ケアをしたときの自信（平均28.0，SD19.6）と今後の自信（平均27.7，SD19.6）についてpaired-t検定をおこなったところ，有意な差はみられなかったが，相関係数は$r=0.833$（$p<0.001$）と強い正の関係がみられた。その他，年齢，経験年数とケアの自信との相関関係は見られなかった。

外国人患者をケアする際の不安の内容をみると，もっとも多く挙げられたのが【言語】959人(94.5%)で，特に受け持ち経験なし群454人（97.0%）が，経験あり群505人（92.3%）に比べ有意（$p<0.01$）に高かった。次に挙げられたのが【文化の違い】で，457人（45.0%）であったが，受け持ち経験の有無では差は見られなかった。３位に挙げられたのが【生活習慣の違い】436人（43.0%）で，これも言語と同様に，経験なし群が219人(46.8%)と経験あり群217人（39.7%）に比べ有意（$p<0.05$）に高かった（図２）。

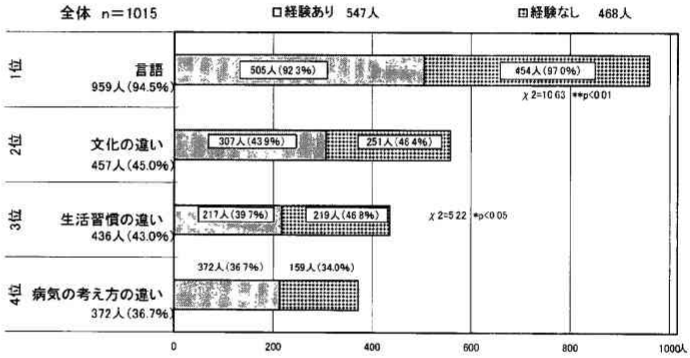

図２．外国人患者をケアする際の不安の内容(複数回答)

外国人が入院したときのために，個人的あるいは病棟でどのような準備をしているかをみてみると，全体的にあまり挙げられなかったものの，受け持ち経験のある群の方が何らかの準備をしている件数が多かった。準備の内容をみると，全体的に1位が辞書・会話の本の準備152件（14.8%），2位がパンフレット等の準備90件（8.8%），3位が英会話の練習・自己学習8件（0.8%）であった。

4．ケアの際の留意点

外国人患者を受け持つ際の留意点を，1位を3点，2位を2点，3位を1点と重みづけをし，積和を算出したものを，外国人患者受け持ち経験の有無別に示した（図3）。もっとも点数の高かった留意点は【コミュニケーション】で特に受け持ち経験あり群に高かった。次に高かったものは【インフォームドコンセント】で，これは受け持ち経験無しの群に特に高かった。これに続き【プライバシー】【生活習慣】がどちらの群でも挙げられていた。

一方，【食事】【生活パターン】【身体の清潔】においては低い点数となっていた。

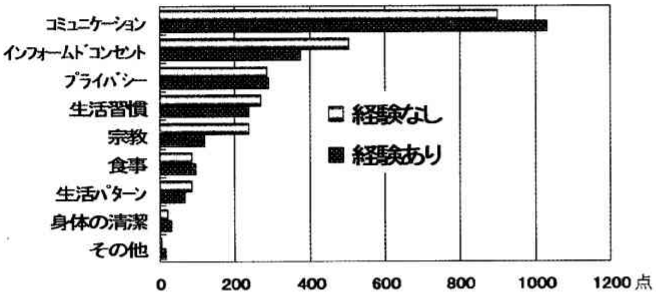

図3．外国人患者受け持ち経験の有無とケアの際の留意点

5．医療保険問題への対応

外国人患者の医療保険問題が発生した時に，対処する職員を見てみると，1位　病院事務員702件（68.6%），2位　ソーシャルワーカー374件（43.8%），3位　看護師長・同等職234件（27.4%）であった。また，医療機関で対応者に差がみられた。

Ⅳ．考察

在日外国人を取り巻く問題に関する研究は，全体的にはまだあまり多くはないものの，外国人の母子保健に関する研究は比較的取り上げられてきた[4,5,6]。これは，在日外国人が若い労働生産年齢人口に集中している[7]ため，女性は子供を妊娠・出産する年齢期であることが影響している[8]といえ，これは外国語での医療相談活動を続けているAMDA国際医療情報センターの電話相談件数にも反映している[9]。しかし，最近では母子保健以外の領域でも問題は大きく，中国や東南アジア系外国人の結核の発生[10]や，外傷や慢性疾患の急性増悪時の救急センターでの対応の問題[11,12]，また，不法滞在者や旅行者などの医療保険の問題など[13,14]も大きな課題となってきており，日本全体における外国人患者への医療，看護のあり方，対応方法を検討する必要に迫られているといえよう。

今回の研究では，医療現場で働く看護師における，外国人患者の受け入れ状況や意識などを明らかにし，今後の具体的な課題を提示することを目的とし，各医療機関における外国人患者への対応，および看護師の外国人患者へのケアの際の認識や留意点，また，各看護師が抱いている不安などについて実態調査を行った。

その結果，まず，医療機関における外国語での対応では，約50%の看護師が自分の医療機関に英語を話すことができる職員がいると答えていたが，これは各医療機関での英語を話す職員の人数を調査したものではないため，実際に各機関に英語で対応できる人が何人いるかは不明である。そのため，英語を話す職員がいると回答していた医療機関でもどの程度のレベルで対応できているか推測できない。西垣内ら[15]の医療現場での英語の必要性の研究では，87%の看護師長が看護現場で英語が必要だったと回答していた。現在の医療の現場では，個々の看護師，医療従事者が英語での対応を準備する必要性が示唆される。

高学歴を誇る日本では，英語は義務教育の早い時期から教授されているため，看護師一人一人も英語の能力がないわけではないが，実用的な英語の学び方をしていないために，実際にはあまり役に立っていないのが現状のようである。亀田ら[16]の調査では，外国人医療において，考えられるケア問題には言葉の問題が大きいが，医療現場では英語を理解できる人が以外に少

ないのが現状であると述べている。近年では看護教育課程の中に，日常英会話や医学英会話を取り入れている機関が増えてきており，また，個人レベルでの海外への進出も増加しているため，今後，個々の看護師・医療職員の実践的な英語力の向上に期待したい。

英語以外の外国語では，対応できる職員がいるとの回答は非常に少ない結果となっていた。日本を訪れる外国人の多くは片言でも英語を理解することができるものが多い[17]が，入国者を国籍別にみると，1位が韓国約25%，2位台湾約20%，3位アメリカ約14%，4位中国約8%と，英語圏以外の国籍が50%以上を占めている[1]。また，長期に滞在する外国人も南アメリカ諸国の日系人が増えており[2]，英語以外での対応が余儀なくされることが予測できる。日本の教育では英語以外の外国語を教授する場が少ないことから，英語と同様な能力を医療現場の職員に期待するのは難しいが，医療機関あるいは病棟レベルで，様々な外国語での対応マニュアルや，パンフレット，必要な会話の訳本などを準備することがこれからの医療現場では必須であると思われる。

外国人患者の受け持ち経験は，今回の対象者の5割を超えており，各地域での外国人患者の増加が推測できる。看護師のケアに対する自信を見ると，受け持ち経験のあった看護師が統計学的には有意に高かったものの，全体的に非常に低く，看護師のケアの自信のなさを伺わせた。また，受け持ち経験者における自信では，以前外国人を受け持ったときの自信と今後ケアするときの自信を比較してみたが有意な変化はなく，また，受け持った際の自信が低いほど今後受け持つ自信も低いという結果であった。これは，以前，外国人患者を受け持った時に自信が持てた看護師は，今後もケアする自信があるが，以前に自信が持てなかった看護師は，今後のケアに対する自信も低いのではないかと推測される。

また，ケアの際の不安は言語であると回答した対象者がもっとも多く，ケアの際の留意点ではコミュニケーションがもっとも高かった。これは先行する研究結果[4,6,16,17,18]と同じであった。しかし，外国人患者を受け入れる準備（パンフレット，マニュアル等）は，あまりされていないという現状も明らかになった。篠田ら[5]の研究によると，看護師の多くはコミュニケーション手段の大部分が言語であると思い込んでいるため，日本語が通じない外国人と接するときに，「説明するのが大変」「どうせ解ってもらえない」などという，拒否的感情をもって接する事が多いと述べている。今回の対象者も言語に対する不安を強く感じており，自信のなさも言語の問題からくるコミュニケーション不足が大きく影響していると考えられる。しかし，井上ら[19]が，「相手に伝えられるメッセージのうち，言語による割合が約30%，非言語的表現による割合が70%である」と述べているように，言葉以外でも意思の疎通は可能であるため，看護師一人一人がコミュニケーション方法の認識を改め，言語・人種を越えて分かり合おうという意識を持つこと，また，可能な限り準備をし，外国語に対する拒否感をなくすことが重要であると考える。

次に不安の内容としては文化の違いが挙げられていた。しかし，ケアの際の留意点では，食事・生活パターン・身体の清潔に関しては，抽出頻度が低い結果となっていた。最近では外国に旅行したり進出したりする日本人も急増したとはいえ，「血統主義」であるといわれる日本においては，日本人の「血」を引いていない外国人を排除する傾向にあり[20]，異文化に対する理解度や認識が低い[21]と言われている。また，文化とは，「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む。」と，広辞苑[22]では記されている通り，文化は人間の生活および精神活動そのものを現す。そのため，日常生活や心理的サポートを業務とする看護では，一人の人間を理解するには，その人の文化を知ることは必須となるであろう。それが，外国人の場合，その人物の育ち生活してきた環境を想像するのは難しく，看護師一人一人が「本当に患者を理解できているだろうか？」と不安を抱くのは当然であるといえよう。そのためには，医療の現場で日ごろから文化の違いとはどういうことなのか話し合い，現場が異文化に慣れることができるよう，講演会，勉強会，交流会など病棟全体，あるいは医療機関全体での努力が必要といえる。

今回の対象者のケアの際の留意点では，コミュニケーションの次にインフォームドコンセントが挙げられていた。これは看護師の患者への情報伝達の義務意識

の表れであることが推測できる。しかし，インフォームドコンセントを効果的に行うには，患者・家族との円滑なコミュニケーションが必要とされ，どの程度的確に患者・家族が検査・治療・処置等を理解しているかが，その後の意思決定に影響を及ぼし，緊急事態発生時への対応にも影響することが推測される。そのためにはどの機関においても，主な検査・治療・処置や疾患などは，外国語で書かれた説明書などを準備することが早急に望まれる。

最後に，医療保険問題への対応をみると，対応者は医療機関でばらつきがあり，各医療機関での苦悩が推測できる。とくに，オーバーステイを含む不法滞在者や外国人労働者の場合，過酷で危険な労働に従事している割合が多いが医療保険に加入している割合が少なく，このことが受診を遅らせる原因となっている報告[23]もある。しかし，医療保険に加入していない外国人患者に対する公的保障制度は確立されておらず，患者が医療費を支払う能力がなくても，医療機関は人道的に患者を拒否することはできず，医療費も負担せざるを得ない[13]のが現状である。このため，各国の大使館・領事館の連携を含め，外国人の医療に対する公的保障制度の確立が望まれる。

今回の研究では，外国人患者が増えている中，看護師の不安や戸惑いを感じることができたと共に，医療現場での対応の遅れ，準備の不十分さが明らかになった。今後，医療者一人一人の他文化・他言語に対する知的・精神的準備と，外国人に対する一刻も早い公的制度の確立が必要であると考える。

V．まとめ

医療機関における在日外国人患者への看護の現状を明らかにする目的で，看護師1024人に対し，自記式調査法による実態調査を行った。その結果，以下のことが明らかになった。

1．何らかの外国語を話すことができる職員がいると回答していた対象者は5割を超え，もっとも多い言語は英語であった。しかし，その他の言語で対応できる職員がいると回答していた対象者は非常に少なかった。
2．対象者の約5割が外国人患者を受け持った経験があった。
3．今後ケアする自信は，受け持ち経験者が未経験者に比較し有意に高かったものの，全体的に非常に低かった。
4．外国人患者をケアする際の不安点は言語がもっとも多く，次に文化の違いであった。
5．外国人患者をケアする際の留意点は，コミュニケーション，インフォームドコンセントが多く挙げられ，食事，生活パターン，身体の清潔があまり挙げられなかった。
6．医療保険問題が発生したときに対応する職員は，事務員が6割，ソーシャルワーカーが4割で，医療機関にばらつきが見られた。

謝辞

本研究に参加ご協力いただいた皆様に，心から感謝いたします。

この研究は，日本学術振興会平成12年度科学研究費補助金の交付を受けた。

引用文献

(1) 法務省入国管理局：www.moj.go.jp
(2) 入管協会：平成12年度版細粒外国人統計，財団法人入管協会，2000.
(3) 岩崎美津枝，只野里子，佐藤小枝子他：外国人労働者の健康調査並びに健康教育・相談，宮城県女川町の水産加工業の労働者を中心とした調査から，第54回日本公衆衛生学会総会　自由集会資料集，外国人在住者の健康問題第4回，3－4，1995.
(4) 吉岡毅：在日外国人の母子保健，危機的状況にある人たち，助産婦雑誌48（8），635－640，1994.
(5) 篠田優子，森朋子，稲垣直子他：より良いコミュニケーションはいかにしたらとれるか，中国人とバングラデシュ人の出産ケア体験から，助産婦雑誌54（8），674－677，2000.
(6) 小野紀子：愛育病院における外国人出産，10年の施行錯誤を振り返って，助産婦雑誌54（8），689－695，2000.
(7) 法務大臣官房司法法制調査部：第38出入国管理統計年報平成11年版，3－5，東京，大蔵省印刷局，1999.

(8) 李節子：在日外国人の母子保健，日本に生きる世界の母と子，東京，医学書院，1998.
(9) 香取美恵子：日本の医療に望むこと，AMDA国際医療情報センターへの電話相談より，助産婦雑誌54（8），704－707，2000.
(10) 山口綾子：結核患者を中心とした在日外国人の健康管理の必要性と看護職の役割，東邦大学医療短期大学紀要13号，71－81，1999.
(11) 尾世川正明，森尾比呂志，野本和宏他：外国人旅行者救急医療の現状と問題点，日本救急医学会雑誌12（10），534，2001.
(12) 坂田育弘，高橋均，北岸英樹他：救命救急センターにおける外国人医療の現状と課題，日本救急医学会雑誌12（10），534，2001.
(13) 葉李久雄，青木克憲，堀進悟他：外国人の救急医療，とくに不法滞在者についての考察，日本救急医学会雑誌12（10），534，2001.
(14) 吉田竜介，大泉旭，相星純一他：外国人の救急医療における医療経済的問題，日本救急医学会雑誌12（10），534，2001.
(15) 西垣内麿留美，大田勝正，田中健彦他：長野県都市部の看護現場における英語の必要性に関する調査，長野県看護大学紀要3，51－56，2001.
(16) 亀田玲子，松田安代：看護の国際化をめざして，手術を必要とした外国人事例に関する一考察，聖母女子短期大学紀要13号，91－98，2000.
(17) 谷口千絵，佐藤千史：何が問題なのか，日本の現状をみる，助産婦雑誌54（8），660－662，2000.
(18) 山村祐子：外国人患者への関わりを考える，聖隷浜松病院看護研究収録2000号，241－247，2001.
(19) 井上雍雄：日本人の常識と社交性，195，東京，創芸社，1990.
(20) 佐藤文明：在日「外国人」読本増補版12－16，東京，緑風出版，1998.
(21) 宮島喬：“外国人労働者の流入と地域の変化”，現代のエスプリ，異文化接触と日本人，横田雅弘，堀江学編，東京，至文堂，94－102，1994
(22) 新村出編：広辞苑　第4版，東京，岩波書店，1998.
(23) 平野（小原）裕子，川田智恵子：在日フィリピン人労働者の医療機関への受診に関わる社会人口学的要因，日本公衆衛生学雑誌47（7），602－609，2000.